イザヤ書28章16節 「シオンに据えた礎の石」

1A 第三の道（19 章 23-25 節）

1B 二極化の時代

2B ローマへの勝利

1C 神に仕えるイエス

2C 神ゆえに屈服した十字架

2A シオンに据えられた石 16

1B 試みを経た石

2B 尊い石

3B 堅く据えられた礎

4B 慌てなくてよい約束

3A つまずきの石（8 章 14 節）

1B 見捨てられた石

2B 砕く石

本文

1A 第三の道（19 章 23-25 節）

私たちが見ていきたい聖書箇所は、イザヤ 28 章 16 節です。「だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。」私たちがこの大会で得た神の恵みを、祝福、神の恵み、その平安はすべて、主イエス・キリストが私たちの礎の石になっているかどうかに掛かっています。

1B 二極化の時代

この大会は早、第六回目を迎えました。第二回目から参加させていただいていますが、それぞれの年が、東アジアもめまぐるしく変わっていっています。けれども、大会の主題になっている御言葉に、私個人は支えられてきました。イザヤ 19 章 23-25 節です。「その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」」この3節の御言葉から、教わることはたくさんあります。

イザヤ書の背景を思い出しましょう。そこには、北からアッシリヤという巨大な国がイスラエルの国やその周辺の国々に侵略を始めていたことです。それで、その地域の国々はアッシリヤに対し

てどう対抗するのかということで、軍事同盟や外交活動が活発になっていきました。ユダの王アハズは、アッシリヤに屈することによって自分の国を守ろうとしました。しかし、アッシリヤはなおのことユダに攻めてきます。それで、アハズの子ヒゼキヤが王になった時は、南にあるもう一つの大国、エジプトと軍事同盟を結びました。エジプトの助けによって、アッシリヤに対抗しようとしました。ところが、エジプトは全く頼りになりませんでした。アッシリヤと戦って負けてしまったのです。それでアッシリヤはどんどん侵略を初めて、ユダの町々を倒していったのです。残るは、エルサレムだけになり、アッシリヤ軍は 18 万 5 千人の軍隊でその町を取り囲みました。

このように、アッシリヤに屈服すべきなのか、それとも対抗すべきなのか、その二者選択が迫られていた中で、預言者イザヤは一貫して、そのどちらも否定しました。「救いは、シオンにあるのだ。」ということです。アッシリヤでもなく、エジプトでもなく、主に拠り頼みなさい。主なる神がシオン、エルサレムにおられるのだから、ここに救いがあるのだ、ということです。エジプトでもなく、アッシリヤでもない、第三の道を選びなさいと命じられたのです。

去年 2015 年において、世界中に見られた兆候の中で「二極化」というものがありました。一方に付くか、それとも他方に付くか、その二つしかなく、その二つが互いに対立していました。私たちが保守なのか、進歩なのか。右なのか、左なのか。私たちは、それぞれの国のために祈りました。為政者のためにも祈りました。すると「あなたはそうやって政府に言いなりになっているのですか。」と言われるかもしれません。しかし、私たちは中国人であろうとも、韓国人であろうとも、日本人であろうとも、その前に天国人です。そして天国人は、「王とすべての高い地位の人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげられるようにしなさい。（1テモテ 2:1）」という神の命令に、従わないといけません。敵を罵るのではなく、祝福するように、全ての人を祝福するように命じられています。

私が派遣されている教会で、ハンガリーの首都ブダペストで教会を行なっている宣教師がいます。そこは去年、何十万ものシリアからの難民が押し寄せ、ドイツに向かって歩いていった舞台となったところです。教会は、すぐに難民の人々に水や食べ物、防寒着などの支援を与え、キリストの愛を示しました。ところが、後にパリ同時多発テロが起こりました。その首謀者はブダペストに来て、テロ実行を行なう者たちを募集していたことが後でわかったそうです。とてもくやしかったそうです。今、アメリカで難民を助けないといけないと言えば、「あなたはテロリストを国内に入れる気なのか？」という誹りを受けるかもしれません。その反対に、少しでも難民問題について懸念を示すと、「あなたは何という冷酷な人か！」という非難を受けてしまいます。どちらかに付くか、という二極化が起こっているのです。しかし、私たちは主の命令に従うのみです。隣人が飢えていたら、助ける、自分自身のように隣人を愛する、という命令に従うのみなのです。

私たちはある問題について取り組もうとする時に、二つに分かれてしまうのでしょうか？その根っこには「恐れ」があります。アッシリヤが攻めてくる恐れがありました。それでアハズはアッシリヤに付き、ヒゼキヤはユダに付きました。しかし、恐れを主の前に持っていくのではなく、自分たちで何

とかしようとして、それで自分たちを主によって守るのではなく、自分で守ろうとしてしまうのです。

しかし、主に拠り頼む時に私たちは力を得ます。どちら側にも、地の塩として塩気のある言葉を持ちます。そして、終わりの日のこの幻を見てください。この小国イスラエルが主をあがめる国として真ん中におり、エジプトもアッシリヤもイスラエルを中心にして、主に仕えるようになるのです。エジプトという国とアッシリヤという国が、イエス・キリストを王とする神の民によって一つになるのです。これが、私たちキリスト者が召されている平和です。主の命令に従うことによって、敵対する両者が主にあって一つにされる、平和の造り手であります。

2B ローマへの勝利

1C 神に仕えるイエス

そして新約の時代のことを思い出しましょう。イエス様がお生まれになり、宣教活動をされていた時代は、ローマの支配下にあったユダヤ人社会です。彼らは、多神教のローマの支配に屈辱的な思いをしていました。けれども、ローマに迎合しなければ生きることができないという現実もありました。それで、ローマに対抗するのか、それとも迎合するのかの二者択一であったのです。それでイエス様に、「税を納めることは、律法にかなっていることですか？」と尋ねました。納めることは律法にかなっていると言えば、ローマに屈することになると考えていた多くのユダヤ人の心は、イエス様から離れます。律法にかなっていないと言えば、脱税をそそのかした罪で、ローマ当局にイエス様を引き渡せばよいだけの話です。

しかし、イエス様にとって、神の国にとって、そんなことはどうでもよいこと、あまりにも些細なことだったのです。そんなことではなく、「カイサルはカイサルに返して、あなたは神にささげなさい。」と命じられたのです。

2C 神ゆえに屈服した十字架

そしてイエス様は、十字架の道を選ばれました。十字架は極刑ということだけでなく、それ以上に、ローマの主権に完全に屈服している姿でありました。ローマに歯向かうならば、このようになるという象徴でありました。それにイエス様は従われたのです。

イエス様は、ではローマに屈服したのでしょうか？いいえ、イエス様が十字架に向かわれる時に、その状況をすべて掌握しておられました。イエス様を捕えに来た者たちに対して、「わたしです。（ヨハネ 18:5）」と言われました。すると、彼らは後ずさりし、地に倒れました。そして、総督ピラトの前では、口を閉ざしておられました。ピラトが恐れて、「ヨハネ 19:10 あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」と言ったら、イエス様は、「19:11 もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」と言われました。そして十字架に付けられている時も、正午なのに空が真っ暗に

なりました。大地震が起こりました。神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けました。そして、十字架刑を執行したローマの百人隊長は、「この方はまことに神の子であった。」とひれ伏したのです！

これが、キリスト者の道です。キリストの命令に徹底的に従う者たちです。そこには、いかに地味に見えようと、いかに誤解されようと、そしてつまずいているように見えようと、屈服しているように見えようとも、必ずこの世に打ち勝つ神の国が建てられています。

2A シオンに据えられた石 16

そこで、そのシオンにある救いの石について見たいと思います。イザヤ書 28 章を開いてください、28 章 16 節に注目します。「だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。」

「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。」とあります。これはユダの人々によっては、エルサレムにある神殿の要石、礎石のことを指していました。あるいは隅石とも訳されています。なぜなら、建物を建てる時に、その土台の角になっているところの石が、建物全体を支えているからです。この要石が私たちの主イエス・キリストであることは、使徒パウロやペテロによって明らかにされています。彼らが、イザヤのこの預言をキリストご自身に当てはめているのです。

1B 試みを経た石

初めに、「試みを経た石」とあります。私たちの主イエスさまは、さまざまな試みを受けられましたが、それでも真価が示されました。あらゆる方面から、いろいろなことをされました。いろいろなことを言われました。そして、私たちが試みに遭う時に、「えっ？こんなことも、主は予め通っておられたのですか？」と驚くほど、全ての弱さをその肉体において担っておられました。

御霊に導かれて、四十日間の断食の後に、悪魔が誘惑しました。肉の欲に訴えられた、目の欲があった、それから高ぶりも試されました。私たちは絶えず試されています。その時に、自分を責め、主が自分から離れてしまったと感じます。いいえ、主はその試みをすべて受けられました。そして、自分の周りの人が、自分の見た目でいつも判断している。相手があれこれ言ってきて、もう疲れてしまった！ということはないでしょうか？イエス様がユダヤ人の宗教指導者にこう言われました。「うわべでさばかないで、正しいさばきをしなさい。（ヨハネ 7:24）」イエス様はいつもうわべで裁かれていました。

この頃、忙しくて、することが多くて、眠る時間も少ないでしょうか？自分の寝ている時でさえ、何か落ち着かない。ああ、どうしようか？主よ！と叫んでいたら、実は主ご自身も同じ悩みを持っておられました。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。（ルカ 9:58）」また、どうして、ある人をキリストにあって育てていこうと思ったのに、一生懸命やった

のに、うまくいかなかったのか？その時は、イエス様が一生懸命育てた弟子たちのことを考えてください。イスカリオテのユダを選ばれたのはイエス様です！自分が病の中で痛みが激しくなっていますか？主ご自身が病を担われた方です。イザヤが預言しました、「イザヤ 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。」そしてご自分が中傷をされたことがありますか？罵られたことがありますか？もちろん、主ご自身の十字架を見れば、主がそこで全ての苦しみを担ってくださいました。

ですから「試みを経た石」に、寄り頼むのです。主が共におられて、そのような否定的な経験、感情、思いとも全てに付き合ってくださり、寄り添ってくださいます。その中で私たちは、さらにキリストのお姿に感謝し、この方にいっしょにいたいと願い、またキリストが内に働いてくださり、自分ではできなかったことを、できるようにしてくださいます。

2B　尊い石

そして、「尊いかしら石」であるとあります。試みを経たところに残るものは、とても尊いです。多くの試験を繰り返して、それで耐えた製品はものすごく良質で、真価があるのと同じように、キリストへの信仰は尊いのです。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」

3B　堅く据えられた礎

そして、「堅く据えられた礎」とあります。主に拠り頼んで生きていく働きは目立ちません。一見、愚かなように見えます。この世に影響を与えていないように見えます。むしろ、失敗しているように見えるでしょう。「何か起こっているな？」と少し興味は持ってくれるかもしれませんが、基本的に無関心です。しかし、それは必ず残るのです。確かに神がみなさんから、みなさんの教会で神は、ご自分の家を建ててくださるのです。

4B　慌てなくてよい約束

ですから、決して焦らないでください。自分で動こうとしないでください。ここに、「これを信じる者は、あわてることがない。」という約束があります。アッシリヤが攻めてきたときに、ユダの国は「これではいけない、これこれをしなければいけない。」として、自分たちを守ろうとしました。けれども、状況はもっと悪化しました。なぜなら、それは恐れの裏返しでしかなかったかです。あるいは、このままではいけないという焦りの裏返しです。主に拠り頼んでいるのは、何もしていないように見えるかもしれません。しかし、主に落ち着いて信頼してください。主が力を与えてくださいます。そして、主が事を行ってくださいます。

3A　つまずきの石（8 章 14 節）

そして、この尊い石に信頼する時は、見捨てられた石に信頼していることを思い出してください。

ペテロが言いました。「1ペテロ 2:7-8 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」のであって、「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。」

1B 見捨てられた石

イエス様は、見捨てられました。神の家を建てるべき宗教指導者たちによって捨てられました。なぜ彼らは、礎石であるはずのイエス様を捨ててしまったのでしょうか？十字架に付けられたキリストは、自分自身が罪人であることを認めなければいけないことを教えます。自分のあり方が罪深かった、誤っていたことを素直に認めければいけないからです。私たちイエス様を信じている者たちは、見捨てることはなかったとしても、つまずいて離れてしまうこともあります。弟子たちでさえ、イエス様を離れていった人たちがいました。イエス様が、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むならば、永遠の命を持つ」ということを言われたら、こんなこと聞いてられないといって弟子たちが離れました。主が甦られた時も、エルサレムから離れて、エマオに向かった弟子二人がいました。彼らは、私たちも、「こんなはずではなかったのに。」と言うことで、心が離れてしまうことがあります。しかし、イエス様の道は見捨てられた石、つまずきの石なのだということを思い出してください。信仰によって、自分には到底理解できなくても、主がここにおらえるのだということを信じてください。自分の期待通りになっていなくても、それでも主が生きて働いておられると見てください。唯一、その立場に立てるのは信仰に立つことです。

2B 砕く石

そして最後に、この石はついに、国々を打ち砕く石となってくださいます。イエス様が、神に反逆する者たち、国々に対してそれらを打ち砕いて、神の国を立ててくださる方です。ダニエル書に「一つの石が、人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これらを打ち砕きました。（2:34）」とあります。

つまり、どういうことか？見捨てられた石が礎の石となりました。しかし、神の家が建てられています。それだけでなく、この地道な道、地味な道、愚かなように見える道、これらがついには、神の国を受け継ぐようにしてくださる、ということです。キリストの弱さは、この世の強い者たちを打ち砕く力を持っておられたのです。私たちも同じで、キリストにあって弱くされていること、これが最も強い者たちを踏みつけるほどの力になるのです。